
仮)) とらぶる

安藤ちさと。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮）とらぶる

【Nコード】

N6117P

【作者名】

安藤ちさと。

【あらすじ】

安藤ちさと。14さい。

不景気の今、家庭の事情により荒れていると有名の公立中に転校することとなった。

彼女は心配していた。さて、その心配はどのような形で現れるのか・

転校

私の名前は、安藤ちさと。

んー勉強は上の下ぐらいで、運動神経も悪くはない。それで、それなりにs c h o o l l i f eを楽しんでいる中学2年生。。

今日から、北沢中に転校することになりました。

以前は、ちよっとした私立の進学校？に通っていたのですが、家庭の都合により地元の公立中に転校することになったのです。

進学校？と？マークをつけたのは、はっきり言って進学校でないからですよ。

進学校といったほうがカッコイイじゃないですか（笑）

あ、s c h o o l l i f eを楽しんでいるってさっき言ったんだけど、アレは前の学校の話ね

それはさておき、この北沢中は悪い噂が絶えない学校。

心配。

親戚の7つ離れたお兄さんは、かなり荒れてたけれどもそれでも十分まともな生徒だったのだ。

心配。

本日2度目。

かなり社交的な私だが、あまりマイナスな事は考えない私だが、心配なのだ。

不安で仕方ない。

が、行くしかない。

ので、現在教室のドアの前にいる。

私は2－1。

1っていう数字が好きだから、少し嬉しい。

ん？

少し？

・
・
・
・
・

いや、かなりかな？

うん。かなり嬉しい★

がんばろ。マイナス思考なんて私らしくないっ！ふんっ！

『がらっ』

・
・
・
う
わ
あ
。

・
・
・

****転校** (後書き)**

初めてなので、変だと思いますが、温かい目で応援してくだされば、
と思います。

いざ、教室。

うわぁ・・・

別に誰かが騒いでいるわけではない。

ただ、誰も先生の話なんか聞いてない。

先生も当たり前なのか、ぼんやり機械が話すような感情のない声で話している。

なんていうのだろう。

心ここにあらず、状態。

全く怖いものだ。

いい環境で過ごしてきた私には、信じられない光景だった。
だった、ではない。光景。なのだ。

「さ、挨拶したら適当に空いてる席に座ってくれ」

これまた、抑揚のない声。

見た目30代後半に見えるが、意外と若い声だった。
20代半ば？そのぐらいかな。

タバコをすっているのだろう。
顔色が悪い。ヤニのせいだろうな。

「はい。

安藤ちさとです。分からないことだらけですが、よろしく願います」

しーん。。。。

反応なし。

みんな無言だった。

怖い。

恥ずかしいとか、何この人たち？とか、そんな思いの前に
怖い。
その一言だ。

個性がない。

空気のような空間。

響く私の声。

息をする声も聞こえない。

生きてる？

問いたくなる。

「じゃ、席着いてくれ」

返事をするのも、億劫になってしまっただ黙って一番近くの窓際の席に座った。

「これでH Rを終わります」

起立、礼。

一時間目までまだ10分ある。
つまり、休み時間だ。

なのに、とても静か。

何人かは教室を出て行った。

他の教室から、にぎやかな声が聞こえる。

なんで？

私、一番まともなクラスに行きたいって頼んだはずなのに・・・

私は隣の女の子に声をかけた。

友達？

「あの・・・」

「はい？」

清楚な感じのさわやかそうな女の子？あれ、重複したかな？

「その、、どうしてこんなに静かな・・・の？」

良かったら、お友達になってほしい・・・ん・・・だ、けど」

「あ、、、

いいですよ。お友達、ですね。

このクラスがなぜ、静かかといいますと、このクラス、くずの集まりだからですよ」

笑わない。

笑えや！

てゆうーか、なんで敬語なの？

「あの、名前は？」

「浅沼紗枝です。」

「なら、紗枝ちゃんって呼ぶね？」

コクン）

かわいっ！

長い髪がくるんとゆれる。

少しうつむき加減で真っ白い肌にほんのり染まった淡い桃色の頬がよく似合っている。

まるで、おとぎばなしにでも出てきそうな可愛い女の子だ。

だけど・・・なんだか、暗い。
もっと明るければモテるのに。

『あの、安藤さん・・・？』

知らない女の子が私の肩をたたいた。
知らないのは当たり前だけれど。

「あ、
・・・？」

「呼ばれてるんだけど・・・」

「ウチが？」

「うん。」

「誰？ま、いや。あんがとう」

私を呼ぶ人？

知り合い？

いたっけ、この学校に・・・。

小学校とは、私の家は微妙に学区が違ってみんなと同じ中学じゃないはずんだけど・・・。

「ちーやうっ！」

私を呼んだのは・・・？

ちーさとっ！

私を呼んだのは、小学校で一緒だった少しギャルっぽい友達、「加藤汐理」。

すこしだからね。少し。

「久しぶりだねっ！なんでココ来たの？」

「色々あってさあゝ・・・てか、なんでこのクラス静かなの？」

「あゝ色々あるからね、なんせ北沢中ですからw」

「なにそれ。そこが聞きたいんじゃない！」

「いずれ、ね。まあ時間があれば話すよ、もう一時間目始まるからっ」

汐理は、6年生の時染めていた髪を黒にもどしてた。

スカートも極端に短くもなかった。

昔みたいに荒れてる感じはない。

「あの、今日の一時間目って数学だよね？」

新しい友達、浅沼紗枝ちゃんに聞いた。

「ええ。数学ですけど・・・先生はいらっしゃらないかと・・・」

「なんで？」

「だって、自習ですもの」

「へえ。そうなんだ」

「忙しいんですって。」

「忙しいって・・・だって本職が授業じゃないの？」

「手に負えない生徒がいますから・・・」

「だからって授業しないの？」

「もう、授業時間なので静かにしてもらってもいいですか？ 私を殺す気ですか？」

「殺すって・・・何言ってるの？」

なんだ？ 変な子

「周りをご覧下さい。殺気立ってるのが感じられませんか？」

周りを見たら確かに雰囲気がピリピリしている。

「とにかく今は静かになさってください」

「うん。分かった。ごめんね」

なんだ？ 変な子だ。

じゃなくて、変ながっこ。

みんなそれぞれの参考書を開いて各自勉強してる。
何この時間？

私も勉強することにした。
持ち歩いてる問題集を開いた。

問題集

問題集といっても、すべて解くわけではない。
あまりに簡単な問題はやりたくない。

だから、少し難しそうな問題から解いていった。
しかし、私の得意科目は数学。それらはすぐ終わってしまった。

「暇だなあ」

窓の外を眺めてみる。

少し寒くなったこの頃。10月の空。

雲がだいぶ近いところに感じられる。手が届きそう・・・。

眠くなってきたので、体を机に倒して寝ることにした。

窓から入ってくる優しい日差しを受け、日光って殺菌作用があるんだよねあと考えている。

気持ちいい。

日の光ってこんなに気持ちよかったんだ。

転校も悪くなかったかも、と思えた。

とつくに忘れていた感覚にもう一度出会えたから。

一度、体を起こして伸びをして私は眠りについた。

夢の中で私は、今の学校に前の学校の友達がいる夢だった。

みんなは勉強していて、私は一人だけ『何バカなことしてんの？』と周りを見渡していた。

そして誰かに背中をたたかれた

新しい友達（前書き）

前回、短すぎてすみませんでした。

新しい友達

「チャイム、鳴ったよ」

肩をたたいたのは、どうやら後ろの席の女子だった。

「あ、どうも」

セミロングの髪で唇がぷるんとしていて、黒の眼鏡をかけている。身長は低めで少しぽっちゃりした感じの彼女。なんか、可愛い子多くない？

「あの、もし良かったら友達ならない？」

敬語ではないが、どこかおしとやかな感じの話し方。お嬢様という言葉が似合いそうだ。

「いいよ。えっと・・・」

「アタシの名前は、堀越あゆみ。よろしくね」

「うん、よろしく。あゆみちゃんって呼ぶね」

「あ、呼び捨てでかまわないよ」

「そう？アタシも呼び捨てでね」

「分かった。なら一緒に理科室行こう？」

「いいよ！場所わかんないんだ」

「えへへ。なら今日学校めぐりしない？」

「いいの？じゃあお願い♪」

なんだ。結構普通の子もいるんじゃない。

「隣の子と友達になった？」

「え、うん。まあ一応」

「そっか。結構変わった子じゃなかった？」

「あ、えっと少しだけけど・・・」

「そっかあ、アタシたちのクラス色々あって変わった子とかいっぱいいるんだよね」

「色々って？」

「うーん。聞きたい？聞かないほうがいいよ」

「え？」

「うん、話変えよう。あのさ・・・」

色々って？

みんなが口裏そろえて言うわけは？

だけど、無理やり聞いたらダメだよね・・・

「あ、こっちが第一理科室で二分野で、こっちが第二理科室で一分野。そっちが準備室。次一分野だからこっちね」

「へえ、」

入ったとたん、異臭がした。

「臭いでしょ。薬品の処理とか全然しないからさあ」
まずくない？

事故おこるでしょ。

「危なくないの？」

「え、危ない？そうなのかな、ここじゃ普通だよ」

「え・・・」

何それ。

「慣れてくよ。」

適当に席についた。

そして、しばらくしてから先生が入ってきた。
これまた女の先生。女といってもおばさんだ。化粧のどぎついおばさん。

「はー」

特になにか言うわけじゃなく、はー、とずっと言っている。
きもいかもーっ！

チャイムがなる。

随分と席に空きがあるのは気のせいかな。

「今日は、教科書31〜35ページ。」

それだけ言うのと準備室に行ってしまった。

生徒たちは黙って動き始めた。

暗く重々しい空気とか苦手なんだ。

なのに・・・。

どのクラスもそうなのかな・・・

新しい友達（後書き）

なんか、納得しない文章。

見てくれている方に感謝です／／
（||
,
w、
||
）
／
／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6117p/>

仮））とらぶる

2010年12月30日18時59分発行